広島大学学術情報リポジトリ Hiroshima University Institutional Repository

Title	『坊っちゃん』小考 : 坊っちゃんの性格と清の役割を中心に
Author(s)	李, 淑暎
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1989 : 49 - 54
Issue Date	1990-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039262
Right	
Relation	



『坊つちやん』小考 ---坊っちゃんの性格と清の役割を中心に ---

李 淑暎

1.はじめに。

私が『坊つちやん』を読んで初めて気付いたのは、いろいろな性格がおもしろく描写されていることであった。登場する人物が、それぞれ一人残らず、特徴のある性格を持っていて興味深い。 むだな人物は登場していないと言ってしまっても過言ではないであろう。その中でも一番目につくものは、やはり坊っちゃんの正直さ、卒直さ、善と、ポットツの善を仮装した為善、悪の対照であるう。

また、坊っちゃんといっも坊っちゃんをかばってくれる唯一の人で よる下女清との関係もなかなかおもしろい。肉を離れた神秘的で、精神的な一種の愛情を共有している者として描かれているのではないか と思う所がある。

それで、私はこの小論文を通して「坊つちゃん」の中に出て来る人物の性格(特に主人会である坊っちゃんの性格)と、坊っちゃんと清との精神的な愛について述べてみたい。

2. 坊っちゃんの性格について。

このような単純な性格を持っている坊っちゃんの行動は、世間には反抗、意地っ張り、乱暴と見られる。常識的に考えればかわいがってくれるはずの両親にさえもかわいがられていない。

母も死ぬ三日前に愛想をつかした――おやぢも年中持て餘してゐる――町内では亂暴者の惡太郎と爪彈きをする(

フまり坊っちゃんは、世の中のだれにもかかいがられていないのである。これについて坊っちゃん自身は別に気にしていない。しかしただ一人 坊っちゃんをむやみに珍重にしてくれる人がいる。それは下

女の清である。清だけが坊っちゃんの内面にかくれている,素朴な純粋さ、正直さ、正義感、義俠心などを正確に見ている。だから清が口にしている「坊っちゃん」という呼称は、のだいこや生徒たちが使っているようにからかいの意味はまったく見えない、尊敬の意味を帶びているのである。

松山中学校に赴任して来た坊っちゃんは、同僚にちにそれぞれまだ名をつける。その人の見かけと坊っちゃんがはじめて見た感じによってその場でつけるおだ名であるけれども、それぞれの人を端的に表わす重要な意味を持っている。

校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数學は山嵐、畫學はのだいる。(二)

その人その人の性格がこのまだ名に絶妙に秒められているのがおもしろい。

このようにくわしく観察して見ると、ほんとうに坊っちゃんが付けたまだ名は外見によるものである同時に、その外見がその人その人をの性格をそのまま反映しているのが分かる。それでその後はずっとおだるで通している。それも全然無理がない。その理由はままりにもその人をの人の特徴と言うものを、正確にとらえたからではないであるう。か、ちゃんの単純で澄んだ目には、その人物のそのままの姿がうつし出されるのであると言えるであるう。

また一方では、このように同僚だちにあだ名をつけることによって坊っちゃんの内面の矛盾を見ることができる。坊っちゃんは、生徒たちがまたらしく東京から赴任して来た坊っちゃんに、「天麩羅先生」とか「團子」とか「赤手拭い」とか名づけてまれこれ干渉したり、宿泊の日に小とんの中にバックを入れたりしたことについては、敏感に

そのため、坊っちゃんが正しいとかたく信じて行なった行動は、悪い方向に進むことが多い。でも坊っちゃんは、それで悩んだり、長く考えたりしない。「おれは何事によらず長く心配しやうと思つても心配が出来ない男だ」。(ミ)自分が善・正として行なった行動だから後はどうなってもいい。よったく結果は対にしない性格とも言えるし、とうせ結果が失敗だったら後でなれこれ考えても仕方がないと、よっさりなきらめてしまう性格とも言えるであろう。

つまり坊っちゃんの行動は、いい結果をキとめて行なれれるれけではない。ただ、正義は必ず勝つと言う信念がよるだけなのだ。このようなかたい信念とくもに、それを通そうとする根気ものぞかれる。これは坊っちゃんのかにパッタを入れた生徒たちが、責任をのがれるために早低な行動をするのを見て憤慨した坊っちゃんの一人言にもよく表れれている。

世の中に正直が勝たないで、外に勝っものがあるか、考へて見る。今夜中に勝たなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、女さつて勝てなければ、下指から辨當を取り寄せて勝つ近こゝに居る。(四)

このように単純で純粋な坊っちゃんの考え方、行動にか水かれ読者はひき込まれるのである。 読んでいるうちに、 坊っちゃんの行動に半ばあきれながらも、 だんだん坊っちゃんを愛するようになるのである

ì.

う、坊っちゃんと清けいいない。 をおって、 をおって、 ででは、最初のなど、 をおっている。 をおったがでくれていが、 をは、かれいが、ったりのは、なが、 を表しては、かれいが、ったりのでは、ないいが、 では、かれいが、ったりのでは、ないないのでは、 を表している。 では、かれいが、ったりのでは、 では、かれいが、ったりのでは、 では、かれている。 では、かれている。 では、かれている。 では、かれている。 では、かれている。 では、かれている。 では、ないは、 では、ないは、 では、ないは、 では、ないは、 では、 では、 ののでは、 ののでは

> 只清は昔風の女だから,自分とおれの關係を封建時代の 主從の様に若へて居た。(~う

実に、清は坊っちゃんに献身的な愛を注ぐのである。それで読者は清の目を通して坊っちゃんの善と言うものを見いだすことができる。つ方清の善は、坊っちゃんの目を通して見ることができる。なぜならば、四国に行って困難な事件に出なうたびに、坊っちゃんは清のことを考えることによってわかる。せちがらい世間のことを一つ一つ経験して行くことにつれて、清の人としての善さを切実に悟るのである。

おれは空を見ながら清の事を考へて居る。金があって、清をつれて、こんな奇麗な所へ遊びに来たら 嘸愉快だらう。いくら景色がよくつても野だ杯と一所がや詰らない。清は 鍜苦茶だらけの婆さんだが、 どんな所へ連れて出たつて 耻 かかしい 心持ちはしない。 (五が

こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この真似をしなければならなく、なるかも知れない。いい(中略)いさうなつては江戸つうも駄目だ。駄目だが一年もかうやられる以上は、おれも人間だから駄目でも何でと左様ならなくちや始末がつかない。どうしても早く東京へ歸って清と一所になるに限る。(+)

他にもいろいろ清のことを思い出す所が見えるが、上に上げた引用

文では、いちばん切なく清のことを思っている。坊っちゃんにとって清は、たんなる下女ではないことを明らかにしている。心を支えてくれる信仰に近い感情の対象であり、帰るべきふるさとの意味を持っているのである。坊っちゃんの結婚は記されていないし、読者は坊っちゃんの妻を想像する余裕を与えられていない。ゆそれは精神的な恋人として清が坊っちゃんの心の深い所に置かれているからではないであるうか。

死ぬ前日おれを呼んで坊つちやん後生だから清が死んだり、坊つちやんの御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊?ちやんの來るのを樂しみに待つて居りますと云った。だがら清の墓は小日向の養源寺にある。(十一、傍点は筆者)

現実としては遂げられない精神的な愛であったから清は死ぬのである。ここで注目しなければならないのは、引用文の「だから」とう言葉である。「坊っちゃんは清の願いをかなえる養源寺に埋めてやる」取るのは、すでに坊っちゃんが清を下せではない信頼できる、そして出るかく美しい心の恋人としてとらえているからではないだろうか。

これは山嵐におごってもらった氷水のお金を返そうと決心して、清のことを思い出す場面である。もう信頼できなくなった山嵐に恩を着るのは、坊っちゃんにとってはたえがたい恥である。しかし清に対しては、坊っちゃんは「他人がましい、義理立てはしない積」とか、「清もおれの片割れと思う」と言うのである。まさに坊っちゃんにとって

清は、心から信頼している対象でなりつがけており、伴呂に近い者で なると言わざるをえない。すなかち、清は坊っちゃんか帰って来るの を待っている彼岸の妻になるのではないであろうか。

これが回想風になっていると言うことからも坊っちゃんがおそらく 大人になっている現在でも、坊っちゃんであった頃のことをわすれて いないことがわかるのである。また、描かれている清はつ根に善良で なり、坊っちゃんは清との美しく幸福な感情を持ちつづけている。 墓と言うのは過去の思い出のものだが、 坊っちゃんは そこに参りつ づけるでよろうし、坊っちゃんの心の中で清は、いつまでも生きてい るのである。

注

- 1)夏目漱石 『坊つちやん』 「『漱石全集』 第二巻」 岩液 書店 1976 月241

- · ル・ノ と同じ ア 244 3)注 l)と同じ ア 260 4) 片 困 良 ー 『 『 4)片园良一"夏日漱石の作品。厚文社 1965 267
- 『夏目漱石 ― 作品の深層世界 ― 』 明治書院 5) 坂本 浩 1979 P 64
- 6)注() X间L" P 2/9
- . , と同じ p 25/ d) 注 1) と同じ p 287 9) 注 1 .
- も)注1)2同じ p201~ p200 9)注1)2同じ p354~ p355
- 10)平固敏夫 『漱石序説』 特書房 1976 P to
- 11)注1)と同じ P382 ~ P383
- ル)村上嘉隆 『漱石文学の人間像。 哲書房 1943 1916
- 13)注1) X同じ P294~ P295

- 参考文献。 1>夏目漱石 『坊つちゃん』 「『漱石全集』 第二巻」 岩波 書店 1976
- 『夏目漱石の作品』 厚文社 1955 ユン 片岡良一
- ア夏目漱石 ― 作品の深層世界 ― 」 3) 坂本 19 79
- 『漱石序説』 稿書房 1976 4)平图敏夫
- 『教石文学の人間像』 哲書房 1983 よ)村上嘉隆
- 『瀬石文学の研究』 明治書院 1948 6)相原和邦
- 1) 荒正人 『評低 夏目漱石』 実業之日本社 1960